

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業
分担研究報告書

アトピー性皮膚炎診療ガイドライン：ステロイド低応答性とタキフィラキシーに関する解説の作成

研究協力者 室田浩之 大阪大学大学院医学系研究科皮膚科学 准教授

研究要旨

本研究の目的は、アトピー性皮膚炎の診療に携わるさまざまな地域のさまざまな診療科の医師が使い、すべての年齢層の患者の診療に必要な内容や患者や家族などの臨床の場での意思決定の参考に資するために必要な内容を含むアトピー性皮膚炎診療ガイドラインを作成することにより、アトピー性皮膚炎の診療の均てん化に資することである。

本ガイドラインでは、クリニカルクエスチョンに対する推奨度の設定に加えて、より詳細な情報を使用者に提供してアトピー性皮膚炎の診療に関する理解を深めるため、アトピー性皮膚炎の診療に重要な事項について解説した文章を掲載することにした。

われわれは、「ステロイド低応答性とタキフィラキシー」に関して、PubMed や医学中央雑誌などのデータベースを用いて検索した情報や国内外の書籍、総説などの情報をもとに解説を作成した。

A. 研究目的

アトピー性皮膚炎の診療を均てん化し、国内のすべての地域でより多くの患者が良質な医療を享受できるようにするためには、皮膚科医、小児科医、アレルギー科医、総合診療医等すべての医師や患者が活用できる診療ガイドラインを作成することが望まれる。

本ガイドラインでは、アトピー性皮膚炎の診療に重要な事項について解説した文章を掲載することによって、より詳細な情報を使用者に提供し、アトピー性皮膚炎の診療に関する理解を深めることを目的とした。

B. 研究方法

ステロイド低応答性とタキフィラキシーに関して、PubMed や医学中央雑誌などのデータベースを用いて検索した情報や国内外の書籍、総説などの情報をもとに、診療上重要な情報に

ついて解説文を作成した。作成した文章は、研究班員による議論と推敲を得て、最終版を作成した。

C. 研究結果

ステロイド外用薬の使用が内服ステロイド薬で報告されているようなステロイド低反応性、または急速な効果の減弱(タキフィラキシー)の病態を生じるかは懸案となってきた。米国皮膚科学会のアトピー性皮膚炎ガイドラインには、専門家によりステロイド外用薬にタキフィラキシーの生じ得る可能性が指摘されているものの、その根拠となる研究や論文はないと記載されている。実際、アトピー性皮膚炎におけるタキフィラキシーの存在は明らかではないが、ステロイドの血管収縮作用を観察した動物実験の報告がある(2,3)。ステロイド外用薬の連日塗布がヒスタミンあるいは刺激性皮膚

炎で見られる血管拡張に及ぼす影響を検討した。その結果、ステロイド外用薬による血管収縮作用は減弱をみとめ、ヒスタミン処理群ではステロイド使用14日目に、刺激性皮膚炎群ではより早期に効果の減弱を認めたことからタキフィラキシーの存在は完全に否定できない。

D. 考察

これらは実験的に誘発された血管拡張をステロイドで抑制する実験であり、病態が多因子性のアトピー性皮膚炎にそのまま当てはめて考えることはできない。

E. 結論

ステロイド外用薬使用中に期待された効果の得られない場合は、タキフィラキシーを考慮する前に、使用しているステロイド外用薬のランクと使用方法および外用に伴う接触皮膚炎の可能性を確認するとともに、持続的なアレルゲンへの暴露といった悪化因子の関与を考慮する必要がある。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

< 論文発表 >

1. Murota H, Katayama I, Exacerbating factors of itch in atopic dermatitis, *Allergol Int*, 66, 8-13, 2017

< 学会発表 >

1, 室田浩之, アトピー性皮膚炎患者に発汗の是非をどう説明するか, 第116回日本皮膚科学会総会, 仙台, 2017, 日本皮膚科学会雑誌, 127, 931, 2017

2. 室田浩之, 意外な汗の免疫機能とその制御, 第66回日本アレルギー学会学術大会, 東京, 2017.

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定も含む)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他